

【研究事例 1】 小学校第 3 学年（器楽）

思いや意図をもった学びを通して、音楽性の基礎を育てる指導方法の工夫 ー器楽の活動と音楽づくりの活動の関連を図ってー

1 はじめに

小・中・高等学校にわたる異校種間で、音楽科の視点からどのような連携が可能なのか、当初は、研究テーマを目の前にして、戸惑ったのが正直なところであった。しかし、共に研究に携わる研究協力員の方々と意見を交わしたり、授業や学校の実際を相互に参観したりする中で、連携の可能性や課題となるものが徐々に明らかになりつつあることを感じている。何よりも、各校種の実態を、授業の実際を通して分析・協議することを研究の軸に据えて取り組んできたことで、異校種間の系統性・発展性を改めて認識するとともに、そこから自校種のこれまでの取組や実践を問い直すことができたのは、大変有意義であった。

それは、異校種間の系統性・発展性を踏まえた自校種での取組の再構築へ向けてのまたとない機会ともなったということである。自校種における指導内容を具体的な学習活動を通して子どもたちが身に付けていけるようにすることは大前提としつつも、そこに、異校種との連携の観点を加えることで、自校種における指導の在り方を、より広い視野から振り返り、改めて構築しうる可能性を実感した。

今回の研究で、全てをカバーできるものではないが、音楽科における異校種の連携の可能性のその一端を切り口として提示することができればと考える。

2 本研究事例の概要

本調査研究の趣旨である『子どもたちに「確かな学力」を身に付けさせるためには、小・中・高等学校の 12 年間を見通した系統的な指導方法を確立することが重要である』ことを踏まえるとともに、学習指導要領改訂に伴う、これからの音楽科の在り方を明らかにしていくことは、重要な課題である。

学校教育本来の使命は、子どもたちの知性と感性の調和のとれた人間の育成である。豊かな感性を育てる音楽科は、その存在意義を確たるものとしていくことが肝要であろう。

それには、教科の目標及び内容を鑑み、着実に指導方法の改善を進めていくことが大切である。児童が身に付けさせる資質や能力を、各題材や日々の授業の中で明らかにするとともに、主体的な、確かな学びの中で、音楽的な成長と人間的な成長を着実に図っていくことが求められる。

また、子どもたちの主体的、且つ確かな学びをはぐくむ、これからの音楽授業のキーワードの一つともいえるものが「思いや意図をもって表現する」である。これを基に本研究事例のテーマを設定した。子どもたちが、単に教師からの一方的な指示や、友達がそうしているから自分もそうするといった受身的な態度で活動するのではなく、自分なりの考えや願いをもって、主体的な態度で活動することが重要である。教師は、子どもたちの思いや意図を理解して、よりよい表現を引き出していくようにすることが大切である。

音楽科の内容を構成する、表現（歌唱の活動・器楽の活動・音楽づくり（創作）の活動）と鑑賞の 2 領域の中で、特に、器楽の指導と音楽づくりの活動との関連を図りながらの実践的な指導方法の研究を推進した。この音楽づくりの活動は、子どもたちが、「自らの感性や創造性を働かせながら自分にとって価値ある音や音楽をつくる活動」である。

音楽に主体的にかかわっていく中で、音楽づくりの活動で身に付けた力を、他の表現活動にも生かしていくことは、音楽科における確かな学びの具現化の一つと考える。

3 研究方法

- (1) 異校種の授業参観及び協議を図る中で、本研究事例の取組内容を明確化する。
- (2) 授業実践による音楽づくりの活動の展開を通して、異校種との連携を意識した実践的な研究を深める。

4 研究事例（小学校第3学年）

（1）題材名 リコーダーと友だちになろう

（2）題材設定の意図

児童は、低学年で学習した音楽経験を基盤にしながら、主旋律を斉唱で声を合わせて歌ったり、身近な楽器で演奏したりする学習を通して、徐々に自分たちの音楽の世界を広げてきている。

自己表現意欲が次第に高まってくるこの時期の児童にとって、リコーダーとの出会いは、大変興味深く、これからの音楽活動への期待に胸ふくらませるものがある。リコーダーに興味いっぱいの児童の思いを出発点とし、楽しく音遊びをしたり、歌う活動を基盤にしたリコーダーの基本的な奏法の学習をしたりする中で、リコーダーを身近な楽器として感じ取れるようにしたい。

そこで、本題材では、リコーダーで楽しく音遊びをしたり、きれいな響きを感じ取ったりしながら、その音色に関心をもち、身近な楽器として感じ取れるようにしていくようにする。そして、リコーダーを自分の体の一部として、その表現する音を大切にするとともに、リコーダーによる音楽表現の楽しさを感じ取れるようにしていきたいと考える。

（3）題材の目標

○リコーダーの音遊びを通して、リコーダーの扱いに慣れる。

○リコーダーの音色に関心をもち、きれいな響きに親しむ。

（4）教材と教材選択の観点

◇「たこたこあがれ」などのわらべうた

「シラ」の2音で演奏できる教材として活用するのに適した教材である。

◇「ゆかいなまきば」小林幹治作詞 アメリカ民謡

軽快な2拍子のリズムにのった楽曲で、動物の鳴き声を模した歌詞がいつそう楽しさをもり立てている。児童に身近な動物たちが描かれたにぎやかで楽しいまきばの情景に親しみをもって学習を展開していくことができるとともに、リコーダーで演奏するかけ声の部分は「シラソ」の3音からなる順次進行で、児童達にとって無理なく容易に取り組むことができる。また、歌と重ね合わせたり、交互に演奏したりする活動を通して、拍の流れにのって歌うようにリコーダーを演奏することに慣れ、リコーダーをより身近に感じ取るのにも適した教材である。

◇「ソラシ」のカノン 吉沢実作詞・作曲

「シラソ」の3音による奏法に慣れてきたところで、単音による表現からリコーダーの音の重なりによる響きの美しさを感じ取って、リコーダーで演奏する楽しさをさらに広げていくことのできる教材である。

◇リコーダーによる鑑賞曲

「いろいろな鳥の鳴き声」「きらきら星」「ぶんぶんぶん」「ゆかいなまきば」等、身近な楽曲を通して、リコーダーの本物の音への気付きとあこがれを促すことが期待できる。

(5) 題材の評価規準

観 点	ア 音楽への関心・ 意欲・態度	イ 音楽的な感受や 表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
題評 材価 の規 準	リコーダーに関心をも って、進んで演奏したり、 演奏の仕方を工夫したり しようとしている。	リコーダーの音色や響 きを感じ取って、音の出 し方を工夫している。	タンギングや息の使い 方を工夫して、きれいな 音でリコーダーを演奏す ることができる。	リコーダーの音色の美 しさを感じ取って聴いて いる。
学 習具 活 体 動 の 評 価 規 準	①リコーダーに興味・関 心をもって学習に取り組 もうとしている。 ②リコーダーの適切な扱 い方や演奏の仕方を理解 し、意欲的に表現しよう としている。	①リコーダーによる 表 現のよさや美しさを感じ 取っている。 ②リコーダーの音色や響 きの美しさに気が付き、憧 れを持って自らつくる音 に思いを込めて表現を工 夫している。	①リコーダーの扱い方や 基本的な演奏技能を身に 付けている。 ②音やリズムを楽譜で確 かめながら、リコーダー で短い旋律を視奏してい る。	①リコーダーのもつ固有 の音や響きの美しさを感じ 取って、範奏を聴いたり、 楽曲を聴いたりする。

(6) 題材の指導計画と評価計画（9 時間扱い）

	○ねらい ・学習活動	評価規準との関連	評価方法	学習活動活性化への視点（指導上の留意点）
第1次 リコーダーに慣れ親しむ。（3時間）・・・本時は3／3				
器 楽 ・ 創 作 ・ 鑑 賞	○リコーダーについて知 る。 ・リコーダーの特徴やリ コーダーの仲間の楽器 について知る。 ○リコーダーに親しむ。 ・リコーダーを使って音 遊びをする。	観点アー① 観点アー① 観点イー①	観察 観察 演奏聴取 発表	・リコーダーの演奏家による演奏を聴き、リ コーダーの本物の音に触れるようにする。 ・リコーダーの頭部管を使った音づくりを通 して楽しく学習を進め、リコーダーにいつ そう親しむようにする。
第2次 リコーダーの音色に関心をもち、リコーダーを楽しく演奏する。（6時間）				
器 楽 ・ 鑑 賞	○リコーダーの基本的な 奏法を身に付ける。 ・「シ」や「ラ」の運指 を覚え、2音で短いふ しを演奏する。 ・「ソ」の運指を覚え、「シ ラソ」の3音で短いふ しを演奏する。 ○リコーダーの響きの美 しさを感じ取って聴く。 ・リコーダーの独奏やア ンサンブルを聴く。	観点ウー① 観点ウー①及び② 観点イー② 観点エー①	演奏聴取 発表 演奏聴取 発表 ワークシート 発表	・単音によるリズム模倣を中心に取り入れ、 繰り返し学習するとともに、個に応じた助 言や励ましを常に行い、支援する。 ・短いふしを扱う際には、即リコーダーの演 奏ではなく、歌うことを基本とした学習活 動（階名唱やタンギング唱等）を基盤にし、 歌唱の活動との関連を効果的に図るように する。 ・親しみのある旋律奏や楽曲を取り上げ、リ コーダーの表現の美しさやよさを身近に感 じ取って聴けるようにする。

(7) 本時の学習 (3 / 9)

○ 本時のねらい

リコーダーで音遊びをして、リコーダーに親しむ。

○ 本時の展開

学習活動	教師の働きかけ○ 児童の反応・	支援○ 評価※
1 既習曲を歌う。 「友だち」	○これまでに歌い親しんだ楽曲を扱い、旋律の流れにのって、のびのびと歌えるようにする。 ・自然で無理のない声で合唱する。	○一斉に歌うだけでなく、個にも視点をあてて聴き合う場面をつくる。 ○曲の山では、フレーズのまとまりに気を付けて歌えるように助言する。
2 既習内容を確認する。	○「春の小川」を階名唱で歌うようにする。 ・階名暗唱をする。 ○リコーダーの頭部管を使ってリズム模倣を行うようにする。 ・リズムや息の強さに気を付けて模倣奏をする。	○階名と五線との関連を意識できるよう、「指差し確認」をしながら、音程に気を付けて歌えるようにする。 ○誰でも模倣できる基本的なリズムパターンで行う。 ○友達の演奏をよく聴いて模倣するように指示する。
3 本時の学習課題をつかむ。	○前時までの学習をふまえて、課題を提示する。 ・リコーダーの頭部管でつくった音を再現し、互いに聴き合う。	○前時までに学習した、リコーダーの頭部管で自由につくった音を振り返るようにする。 ○友達のつくった音から感じ取ったり、思い浮かんだりしたことを発表し、その音を共有できるようにする。
リコーダーで鳥の声をつくって楽しもう		○これまでにつくった音をきっかけにして、つくる音をさらに焦点化した課題を提示する。
4 リコーダーの頭部管で音づくりをする。	○音づくりのポイントを整理する。	○手の平や指の使い方、さらには吹き方を工夫して音をつくるとよいことを確認する。また、実在の鳥だけでなく、自分のイメージをもとにつくった鳥の声でもよいことを伝える。
・個別に音づくりをする。	○一人一人が自力で鳥の声をつくることができるようにする。 ・工夫しながら自分の音（鳥の声）をつくる。	○個別指導しながら、つくった音を聴き、工夫点等を認め、励ます。
・つくった音を発表し、聴き合う。	○つくった音の発表を通して、そのよさや工夫した点を分かち合えるようにする。	○友達のつくった音のよさを共有できるように、集中して聴けるような態度を促すとともに、聴いて感じ取ったことを言葉にして表すよう指示する。その際は、音づくりのポイント（手の平・指の使い方・吹き方の工夫）として確認したことを想起できるよう助言する。



【表現の技能】

学習活動における 具体の評価規準	◎具体的な評価方法 ○Cと判断される状況への働きかけ □評価のポイント ○Aと判断するキーワード
① リコーダーの扱い方や基本的な演奏技能を身に付けている。	◎具体的な評価方法 息の使い方や運指、タンギングに気を付けて演奏している様子をとらえる。 ○Cと判断される状況への働きかけ 個別につまずき箇所を明らかにし、指導助言する。特に、タンギングはあせらず、無理なく身に付けていけるように指導する。 ○Aと判断するキーワード □基本的な奏法を確実に身に付け演奏に反映。 長い息づかいで運指やタンギングに気を付けて、丁寧に表現している児童をAの対象とする。
② 音やリズムを楽譜で確かめながら、リコーダーで短い旋律を視奏している。	◎具体的な評価方法 短い旋律や楽曲を、範奏の聴取や階名唱等を手掛かりにして視奏表現している様子をとらえる。 ○Cと判断される状況への働きかけ 範奏と一緒に口ずさんだり、階名視唱に慣れる活動を通して楽譜上の音を確認められるようにする。 ○Aと判断するキーワード □自ら積極的に視奏に取り組む様子 □新たな楽曲視奏への意欲的な取り組み。 視奏に積極的に取り組むとともに、自らレパートリーを増やしていこうとする児童をAの対象とする。

【音楽的な感受や表現の工夫】

学習活動における 具体の評価規準	◎具体的な評価方法 ○Cと判断される状況への働きかけ □評価のポイント ○Aと判断するキーワード
① リコーダーによる表現のよさや美しさを感じ取っている。	◎具体的な評価方法 範奏を聴く様子や音づくりをしている様子を、表情や発言、実際につくる音の聴取からとらえるようにする。 ○Cと判断される状況への働きかけ 友達の発言やつくった音を全体で分かち合う場面を通して、どのような点に気を付けて聴いたり、音づくりしたりすればよいか、ポイントを指導する。 ○Aと判断するキーワード □集中して範奏を聴く表情や発言の様子。 □音を丁寧に表現しようとする取組の様子。 よさや美しさを感じ取って積極的に発表したり、友達の表現のよさを分かち合ったりしている児童をAの対象とする。
② リコーダーの音色や響きの美しさに気付き、憧れを持って自らつくる音に思いを込めて表現を工夫している。	◎具体的な評価方法 範奏を聴いて、短いふしを演奏できるようにする過程で、リコーダー本来の音色を表現しようと、基本的な奏法に気を付けながら、繰り返し自分の演奏を練り上げている様子をとらえる。 ○Cと判断される状況への働きかけ 一緒に演奏したり、つまづき箇所を見極め、適切な助言をして、意欲を喚起する。 ○Aと判断するキーワード □自ら進んで表現活動に取り組む。 □フレーズのまとまりや旋律の流れを生かした演奏。 リコーダーの表現に憧れを持ち、自らの表現を意欲的に練り上げようとしている児童をAの対象とする。

【鑑賞の能力】

学習活動における 具体の評価規準	◎具体的な評価方法 ○Cと判断される状況への働きかけ □評価のポイント ○Aと判断するキーワード
① リコーダーのもつ固有の音や響きの美しさを感じ取って、範奏を聴いたり、楽曲を聴いたりする。	◎具体的な評価方法 範奏や楽曲の鑑賞の活動を通して、リコーダーの固有の音色の特徴を感じ取って聴いている様子を、ワークシートへの内容や発表からとらえる。 ○Cと判断される状況への働きかけ 聴き取るポイントを明示したり、他の楽器との比較聴取をしたりして、リコーダーの音色の美しさを感じ取って聴けるようにする。 ○Aと判断するキーワード □積極的な発言やワークシートへの音楽的要素の記入。 積極的にリコーダーの音色の特徴をとらえたり、その美しさを音とともに曲想等楽曲との関連で聴いている児童をAの対象とする。

5 成果と課題

音楽科の研究テーマである「異校種間の連携による音楽活動の基礎的な能力の育成」に即した視点から、本事例の成果と課題を明らかにしたい。

本事例で取り上げた中学年は、低学年からの音楽経験に加え、音程感の発達など音に対する感覚が伸びてくる時期である。この時期を逃さず、発達の段階に応じ、幅広い、豊かな音楽経験を積み重ねていくことが大切である。それが、高学年、さらには、中学校、高校での音楽活動の発展・深まりにつながる基礎になると考えるからである。

《成果》

- 中学年の特性を踏まえて、器楽の活動と音楽づくりの活動との関連を図るなど、音楽体験の幅を広げることで、児童の音楽性をいっそう豊かにする指導方法を工夫することができた。
- 音楽づくりによる即興的な表現を音楽的に体験することの意義を再確認できた。それは、音楽づくりの活動で学んだことが、他の表現や鑑賞の活動で生かされたり、上級学年での音楽活動の素地となってきたりするということである。
- グループ内での互いの表現の知り合わせや聴き合いなど、友達（人前）の前で表現する機会を積極的に取り入れ、その抵抗をなくしていくことが、音楽表現することの楽しさや音をつくる喜びにつながっていくことが明らかになった。
- 音楽づくりの活動において、「反復」や「問いや答え」などの「共通事項」との関連を図っていくことが、児童の思いや意図をもって表現することに有効な手だてとなった。

《課題》

- ◇ 「共通事項」を一つの視点にしながら、表現と鑑賞の活動の指導内容をとらえることで、異校種それぞれではぐくむべき資質や能力の系統性が効果的に明らかになり、関連付けられる。そのような視点からの実践的な検証も必要である。
- ◇ 音楽づくり（創作）の活動の際には、偶然性の音楽から必然性のある音楽作品につくっていく、音楽的な内容を意識していくことが重要である。